

幼児期の依頼性と独立性



莊 司 雅 子

一

幼児は文字通り幼いものであり未成熟者である。だから幼児はおとなの社会でひとりで生活することはできない。おとなに依頼してはじめて生きていくことができる。それゆえに依頼性ということがこの時期の生命発展の一つの特徴であるといわれている。ことばを換えていえば幼児は未成熟者だからおとなに依頼しなければならぬ。ところがこの「未成熟」ということばを考えてみなければならない。デューイにいわせると、未成熟ということばの頭文字の「未」は決して否定的な消極的なことばではなくて、むしろ肯定的な積極的

な意味をもっている。幼児はもちろん未成熟者であるに違いない。しかし未成熟とは成熟への可能性以外のものではない。この成熟への可能性の強いことを深い確信をもって唱導した代表者はフレーベルとデューイとである。二人とも幼児が未成熟者であることを、能力に欠けているものであるとか、無能力なものであるとか解釈することはできないと強調している。未成熟を「欠乏」の意味にとるのは、幼児期を本質的にみないで、単に比較的にみるところからくる。実際われわれはしばしば未成熟を欠乏と解釈し、幼児をそのようなものとして扱う場合が少なくない。われわれがおとなを標準とし

て幼児をはかるとこのようになる。ところが、幼児をおとなと比較してみるのではなくて幼児そのものの立場になってみると、未成熟はかえって積極的な力、成長する力を意味することになる。したがって、われわれは幼児を育てる場合、無理に幼児から積極的な行動を引きだしたり誘導したりする必要はない。というのはいやしくも生命のあるところ、そこには必ずや、うちからの旺盛な活動が発露するからである。幼児はもともと自己活動をするものである。だから成長とは子どものためにそこから何かがなされるのではなく、子どもみずからがなすということにある。

このように考えてわれわれは、成人がもっている能力を標準として、幼児を未成熟者と判断することをやめなければならぬ。同様にわれわれの期待する特性が、現在、幼児に欠如しているからといって、幼児を未成熟者と考えるはならぬ。こうした考えをすてない限り、われわれは教えることを、あたかも幼児の精神的なよろもろの器官の空洞に知識をそそぎこんで、その欠如をみたくす仕事であるという意味にとる。生命は自己活動的の成長ないし発展を意味するから、幼

年・少年・青年・壮年・老年と区別なく、同様の内的充実と、同様の絶対的要求とをもって、積極的に伸びてゆく。だからいずれの成長段階においても、幼児は成熟しているともいえず、また未成熟であるともいえる。三歳児は将来のかれと比較されると未成熟であるが、しかしいやしくも三歳児としての発達の可能的段階に達している以上、成熟しているといえる。だから教育は年令のいかんにかかわらず、それぞれの段階の成長を可能ならしめ、それぞれの段階に適当な生活を営ませるいっさいの条件を供給する仕事でなければならぬ。従来ややもすれば、教育とはまず幼児の未成熟な状態をできるだけやくとり去ることであるように理解されているが、それはあやまりである。

二

右のように考えるとき、幼児がおとなに依頼して生活しているのは、無能力者であり力に欠けているということではないことがわかる。それはもつと積極的な意味すなわち幼児が自らの力を自分で独立して用うるためにおとなに依頼してい

るのである。事実幼児は現在のおとなの社会でひとり生活することはできない。おとなに依頼してはじめて生きていくことができる。しかし依頼性とは何か。依頼性がもし単に無力や無能を意味するものであったら、そこにはなんらの発展もありえない。単に無力や無能力なものはすでにデューイも指摘しているように、一生を通じて他人の厄介にならなければならぬ。ところが依頼性は能力の成長発展に付随するものであって、必ずしも常に寄生的態度をもって進んでゆくものではない。それはむしろ建設的なもの・積極的なものがひめられていることを意味している。もちろん単に他人に擁護されるだけでは、真の成長は遂げられない。というのはそれでは無力なものがいよいよ無力なものになるからである。なるほど幼児は生まれ落ちてから長い間、おとなの社会でひとりで生活することはできない。そのために幼児はおとなに依頼しなければならぬ。しかしそれは生命の無力や無能力を意味するのではない。おとなにくらべて、精神的に肉体的に力も能力も十分でないということである。しかし幼児がこのようにまだ無力にみえるのはデューイによれば、これを補う

ある力が存在していることを暗示している。このことは野獸の仔に比較してみると明らかである。野獸の仔は生まれると同時にひとりで生活できる。鶏の子は生まれるとすぐ二本の脚で歩くことができる。けれども攀じ上ったり踊ったり滑走したりすることはできない。人間の子は学ばなければできないが、しかし学べばそれが立派にできる。こう考えると、幼児が無器用で他人への依頼性をもっているということは、人間がそもそも他の動物よりも複雑な高尚な社会生活をしなければならぬ特徴をもっているということを意味している。一言にいってわれわれ人間には社会生活に耐えるために、長い間の訓練期間が必要である。いうまでもなく、人間の子は他の動物と異って、そうした訓練に耐えうる素質を持っている。この訓練の必要から幼児は誕生の際はもちろん、その後もひきつづいて自己の生活を他人に依存しなければならぬ。さればと云って幼児の成長発達はことごとくこれを他人に依存していると結論してはならない。幼児は一面他人に依存すると同時に、他面誕生の瞬間から独立を求めている。依存と独立との両者の交錯は幼児の生活にあらわれている。

る。しかもこの依存と独立の原理は、成長したわれわれおとなの日々の生活にもあらわれているのではないか。考えてみると、社会的動物としてのわれわれ人間の生活は、すべて依存と独立との両面生活である。幼児における社会性の最初のあらわれは、フレーベルにいわせると、母親にもらず幼児の最初の微笑である。幼児の最初の微笑は、なるほど一面からみると身体上の自我感情、すなわち気持ちのよいときの自我感情の発露であるが、しかしそれは単にそのような生理的なものではなくて、まず第一には母と子との間の、次には父や兄弟姉妹との間の、さらに後には人類との間の共同感情ないし社会感情のあらわれであるといつてよい。この社会感情はこのようにまず母と父とに、ついで兄弟姉妹に結びつき、遂には隣人と人類とに結びつくから、幼児の最初の微笑は人間形成の上からみて深い意味をもっている。いうまでもなく幼児の社会性はときの進むにつれて次第にいろいろの形をとって変化してゆく。身体の成長や精神の発達の面において、幼児は他人に依存し他人の支持を求めずにはいない。単に身体的の支持だけではなくて、精神的には例えば愛情を求めたり、従

属の感情を欲したりする。特に親から愛されたいという欲求はジャーシルドも報告しているように、年令の長ずるにしたがって種々なる形と強きとをもつてあらわれてくる。ところがこの依存性と反対に、身体的にも精神的にも両親やおとなから独立しようとする欲求も漸次強くなってくる。というのは幼児もまた他に依存すると同時に自己の独立を求めているものだからである。このようにして幼児は自己の能力に適した種々なる仕方、他人の力を借りずに事を行なおうとし、他人に抱かれなくて歩こうとし、他人の監視から離れて自由に歩きまわろうとする。のみならず自分で考え自分で決断し自分で行動しようとする。もちろんこれら二つの傾向がときには衝突する場合もある。それは成長しているしるしであるから何ら気にとめることはない。以上の原理から、わたくしどもはこの四月に迎える新入園児の教育について、いま一度考えてみたいものである。わたくしどもは個々の幼児が独立していくよう手を延ばすのであって、幼児の依頼性を助長するような結果をもたらさないよう日々の保育を工夫しなければならぬ。